Angel

Angel (2001.7)

　祠堂学院を卒業して３年。
　オレは親父のあとを継ぐ為にアメリカに、託生は日本の音大に進んだ。
「一緒に行けない」
　託生は目を真っ赤にしながら、ストラディバリをオレの手に押し付けた。
　そして、それきり。
　託生の声を聞くことも、抱きしめることもできないまま、３年の月日が経ってしまった。
　あの頃は、託生がいない生活なんて考えられなかった。しかし、今ここでオレは生きている。
　いや、生きているのは肉体だけか。
　心はあの頃に置いてきているのだから。

　高校３年の夏。卒業後二人で暮らす為に買ったマンション。必ず来てくれると信じて疑わなかった。
　一度も託生が訪れることなく、今はただ寂しさに耐え切れないオレを静かに迎えてくれる。
　いつ託生が来てもいいように、特別に作らせた音楽室。部屋の中央には、グランドピアノが鎮座している。
　主のいないこの部屋で、仕事で疲れた体を癒すのが日課となってしまった。
　今日もまたソファに腰掛け、２年間託生が弾いていたストラディバリを撫でる。
　託生の温もりが残っているような気がして……。
「託生……逢いたい」
　オレは手の中のバイオリンを抱きしめ、呟いた。
　ふいに電話のコールが鳴り響き、夢の中から現実に引き戻される。
「Hello」
「あ、ギイか。夜遅くにすまんな。実家に掛けたらこっちだって言われて」
　懐かしい相棒の声が流れてきた。
　滅多に電話を掛けてこない章三のコールに不安が過ぎる。まさか託生の身に何かあったのだろうか？
「めずらしいな、章三。元気にしてたか？」
　不安にほんの少し声が掠れた。気付かれただろうか。
　わずかな沈黙のあと、章三が口を開いた。
「ニューヨーク時間、明日の午後２時４５分。ジュリアード入学の為、葉山がケネディ空港に着く」
　え……？今、何と言った？
　託生がこっちに来るのか？
「おい！ギイ、聞こえているのか？」
「あ……あぁ。聞こえてるさ。託生が……来るんだな？」
「そう。下宿がみつかるまで、ホテルにいると言っていた。口止めされていたんだが……言ってたおいたほうがいいと思ってな」
「口止め？」
「あいつ、ギイに合わせる顔がないって、だから言わないでくれって頼まれた」
「オレは……託生がどう思ってても、逢いたい」
　あのときは、仕方がなかった。お互い進みたい道が違ったのだから。今更、あの時のことをどうこう言いたいわけじゃない。
　ただ、託生に逢いたいだけなのだ。
「それを聞いて安心したよ。この３年、かなり無理していたからな。今度こそ、子守りから解放させてくれよ」
　安心したような章三の声が届いた。託生の日程を聞き、電話を切る。そして、そのまま島岡の携帯を鳴らし、今週一杯仕事をキャンセルした。
　急な我侭に絶句した島岡だったが、オレの口調から何かを察したらしく、理由を聞かずに休暇を受け

入れてくれた。
　明日託生に逢える。
　ベッドに転がっても、目が冴えて眠れやしない。
　あいつは今でもオレのことを、愛してくれているだろうか。あの頃と同じ瞳で、微笑んでくれるだろうか。もう一度この手に抱きしめることができるだろうか。
　託生に逢える嬉しさと不安がないまぜで、長い夜が更けていった。

　ケネディ空港、到着ゲートで託生を待つ。
　高２の春休み、託生とニューヨークに帰ったことを思い出す。
　あの頃はお互い子供で、将来のことを話すこともしなかった。少しでもそれを遠ざけたかったのかもしれない。
　でも、今は違う。
　オレも社会人になり、託生も自分の意思でここにくるのだ。親の許しがいる年齢ではないのだ。
　ゲートから人が押し出されてきた。目を凝らして、託生の姿を探す。
　見覚えのあるコートを着た託生が、スーツケースを転がしてゆっくりと歩いてきた。
　オレがプレゼントした、あのコート。まだ着ていてくれたんだな。
　嬉しさを隠して託生へと歩み寄る。
「よく来たな」
　突然現れたオレに託生は一瞬瞳を揺らし、ひとつ浅く息を吐くと、
「赤池くんに言わないでくれって言ったのに。忙しいんだろうに、ごめんね」
　知り合ったばかりの他人に向けるような、微笑を浮かべた。
　とたん、背中に冷たいものが走る。
「託生が気にすることないぜ。今日は予定が何も入っていなかったんだ」
気付かないふりをして、言葉を繋いだ。
「駐車場に車置いてあるから行こう」
　託生の手からスーツケースを奪い、先に立って歩き出した。一瞬触れた託生の手は、小刻みに震えていた。

　おとなしく助手席に座る託生を、横目で伺う。
　少し痩せたな。薄くなった肩。浮き出た骨が妙に色っぽい首のライン。
　黙ったままだった託生がふいに口を開いた。
「ホテル、予約してるんだけど……」
「バイオリンの練習ができないから、ホテルはキャンセルしたぞ」
「え……？」
　少しばかり、目を丸くして託生が応える。
「オレのマンションに泊まれよ」
　『ギイのバカ！いつも勝手なことばかりして！』を予想していたオレは、次の言葉に驚いた。
「そうだね。練習できないもんね。でも、そんなに迷惑かけていいのかな？」
　先ほどの困ったような微笑を浮かべる。
「遠慮する必要はないぞ。それに、ジュリアードまでは徒歩圏内だ」
「うん。じゃ、お世話になります」
　素直な託生に不安を隠せず、まじまじと瞳を探る。ふっと反らされる視線。
　話をする意思のない託生に、わからないように溜息をつき、運転に意識を集中させようとして気が付いた。
　まだギイと呼んでもらってないことを……。

　マンションの駐車場に車を入れ、エレベーターに託生を促す。
　あれ？という顔をして、託生が口を開いた。
「ここだったっけ？」
　一度来たことのある崎家の本宅のことを指しているのだな。
「大学卒業と同時に家を出たんだ」
　ほんとは祠堂を卒業したときなのだが、今は言わないでおこう。
「へぇ。もう卒業しちゃったんだ。すごいね」
　どこかしらぎこちない笑顔で、託生は笑った。
　壁ができている。託生が作った壁。心を読まれないように、必死でバリケードを作っている託生が哀しくなった。
　オレが見たいのは、こんな笑顔じゃない。
　どうしたら元の託生に、戻ってくれるんだ？
　それとも、この３年間は長すぎたのか？

　時差ボケで疲れているだろうと、夕食後すぐに寝室に案内する。
　もともと託生と暮らす為に買ったものだから、あいにくとここには寝室がひとつしかない。オレのベッドの隣、サイドテーブルを挟んだベッドを指すと、
「先にシャワー使ってもいい？」
　と、バスルームへ入っていった。
　どうしたらいい？
　水音の跳ねるバスルームを見ながら、大きな溜息を吐く。
　こんなに近くにいるのに、託生の心が見えない。接触嫌悪症ではないが、心が拒んでいる。
　しばらくすると、託生がパジャマを着こんで出てきた。
「シャワーありがとう」
　雫が落ちる髪にドキリとしながら、平然なふりをしてバスルームへ向かう。
　出る頃には、もうベッドで寝ているんだろうな。
　そんなことを考えた。
　シャワーを浴びて出てくると、意外にも託生は起きていた。ベッドに腰掛け、うつむき加減に何かをしている。
「何してるんだ？」
　問い掛けると、
「腕時計、合わすの忘れてて。思い出した時にしないとまた忘れそうだから」
　片手で腕時計を振った。
　竜頭を引っ張りだそうとしているが、どうも上手くできないらしい。
　こういうところは相変わらず不器用なんだな。
「貸してみろ」
　託生から腕時計を奪うと、自分のベッド、託生と向かい合わせに腰掛け、サイドテーブルの時計を見ながら時間を合わせてやった。
「ほら、これでいいか？」
　託生に時間が確認できるように見せてやる。
　ありがとうと時計を受け取るその時、あの甘い香りと冷たい指先に、オレの中の何かが弾けとんだ。
「ん……！」
　託生をベッドに押し倒し、柔らかい口唇を奪う。
「い……やだ……」
　開いた口唇に舌先を差込、怯える舌を乱暴に絡める。逃げを打つ体を羽交い絞めるように、きつく抱きしめた。
「や……め……やめて……！ギイ……！！」

「……やっと、呼んでくれたな」
　瞳を合わせて呟くオレを、ハッとしたように見つめ、両手で顔を覆った。
「どうして……？」
「何だって？」
「どうして、放っておいてくれなかったの？」
「託生？」
「やっと慣れたのに。ギイのいない生活に……やっと慣れてきたのに……」
　振り絞るように言った託生の手を、ゆっくりと開いてやる。
　涙に濡れた頬に、キスを送る。
「オレはもう一度託生に逢いたかった。もう一度この腕に抱きしめて、キスをしたかった。……託生は逢いたくなかったのか？」
　視線を合わせ、静かに問い掛ける。
「また、離れ離れになったら、どうするんだよ？……今度こそ狂っちゃうよ……」
　これ以上の愛の言葉があるだろうか。
「オレのこと、愛してるよな？愛してくれているよな？」
「……」
「また、離れ離れになったとしても、オレはお前の元に帰る。愛を確認できなかった３年間に比べれば、何てことはない。託生がどこにいても、お前に会いに行く」
「ギイ……」
「愛してる、託生。お前を忘れたことなど、一度もなかった」
　閉じられる瞳。と、同時に首に回された両腕がオレを引き寄せる。そのまま触れるだけのキスをして、託生は視線を合わせた。
「ぼくも……愛してるよ、ギイ」
　あの頃の儚げな、オレを魅了してやまない優しい微笑を浮かべた。
「託生……！！」
　託生がこの腕に帰ってきたと実感できる、瞬間だった。

　３年ぶりに肌を合わせた託生の体は、以前にも増して艶やかで、眩暈さえ感じた。
　体の隅々にキスの雨を降らす。その度にしなやかに体を揺らし、甘い声で応えてくれる。
「託生、愛している」
　耳元で囁くと、ビクリと体を弾ませ、満足の溜息と共に腕と脚をオレの体に巻きつかせた。
「ギイ……愛してる……」
　そのまま託生の口唇にキスを落とし、ゆっくりと体を沈めていく。
「く……！うん……」
　３年ぶりの行為がきつくない筈がない。託生は廻した腕に力を入れ、逃げを打つ体を食い止める。
「託生……大丈夫か？」
　オレは動きを止め、目尻に光る涙を吸い取ってやる。
「うん……大丈夫……だ……から、続けて……」
　涙に濡れた瞳でふわりと微笑み、自ら腰を押し付けてきた。
　そんな託生の仕草に、オレの理性が崩れていく。
「もう……止まらないからな……！」
　オレの腕の中で、苦痛から快楽に溺れていく託生の変化に煽られて、手加減など出来なくなっていった。
「託生……たくみ……愛している……」
　額に浮かぶ汗を捕えながら、愛しさが満ち溢れてくる。
　この腕に託生がいる。この体もこの吐息も全部オレのものだ！託生が天使ならば、この手で翼を折ってやる！二度と離すものか！

心で叫び深く杭を突き刺すと、託生は声にならない悲鳴を上げ意識を飛ばした。

夜明け前、ふと目覚めたオレの横で安らかな寝息をたてている託生。額に軽くキスを落とすと、ふわりと微笑みオレの胸に擦り寄ってきた。
抱きしめる腕に力をいれて、その温もりを確認する。
これからがスタートだ。
離れていた時間はもう戻りはしないが、もう一度、お前と一緒歩いていく。
愛してるよ……託生。
戻ってきたオレのAngel。

私にとって処女作であります（恥ずい・汗）
個人的な理由で掲載を中止してもらいましたが、とてもとても、思い入れのあるシリーズです。
どれだけ離れていても、託生くんとギイは最後には幸せになって欲しいと、いつも願っています。
しかし、むっちゃマジメに書いてるなぁ。この頃（笑）
たまにはマジメなものも書かないと・・・・・・。
（２００２．９．４）

翼を広げたAngel (2001.8)

「ニューヨーク時間、明日の午後２時４５分。ジュリアード入学の為、葉山がケネディ空港に着く」
　葉山の乗った飛行機が飛び立つのを見届けた僕は、成田の駐車場でニューヨークにいる相棒に電話を掛けた。
　案の定、あいつは葉山を忘れてはいなかった。今頃嬉々として出迎える準備をしているだろう。
　これで、よかったんだよな、葉山。……いや、託生。
　胸の奥に苦いものを噛み締めながら、蒼い空を見上げた。

　３年前ギイと別れた葉山は、見ている者が辛い程無理をして笑っていた。
「大丈夫だよ」
　そう言いながら、でも時々ふっと遠くを見る眼差しに、気が付けば追いかけていた。
「栄養失調になりそうだから、近くに住んでやるよ」
　同じマンションに住んだのも、葉山の側にいたかったから。ギイ程ではないにしろ、頼りにされたかったから。
　見守るだけでよかった。恋人の相棒から、葉山個人の友人して認知してもらえたら、それだけでよかったんだ。
　大学は別々であれ、僕達はよく連れ立って遊びに行った。葉山の希望でディズニーランドにも行ったな。
　何もない時でも、お互いの部屋を行き来し、「めんどうだから」と合鍵を交換する仲になった。
　それでも、葉山の中にはあいつしかいなかったんだ。
　いつのまにかあった黒いシンプルな灰皿。葉山が使わないのは一目瞭然だ。
　僕の入り込む隙間は１ミリもなかった。……そのはずだった。

「眠れないんだ」
　目の下に隈を作り、葉山が僕の部屋を訪ねてきた。
　丁度、試験と重なり１週間程会っていなかった時のことだ。
　あまりにも青白い顔に、
「食うもん食ってるか？」
　と聞くと、首を横に振った。
　あいにくと買い物にも行ってない状態だったので、とりあえず栄養を補給させ、アルコールを飲ませる為に、居酒屋に向かった。
　どちらかと言えば笑い上戸で、いつも陽気に飲んでいる葉山がその日はやけに無口で、何かに悩んでいる事は明白だった。いつもなら、葉山の性格上すぐにぼろが出て、フォローなり何なり出来るのだが、今回は何故か見当がつかない。
　もう少し頼りにしてくれてもいいのに、小さく溜息をつき、箸の進まない葉山にあれこれ世話を焼く。
　帰ってすぐに眠れるようにと酒を飲ませたものの、気が付けば葉山は脚がおぼつかない状態になってしまっていた。
「飲ませすぎたな、大丈夫か？」
　そう言いながら、葉山に肩を貸しマンションへの道のりを歩く。
　頬にあたる葉山の吐息。酔いが回り潤んだ瞳。
　こんなに色っぽい葉山は初めてで、抱き締めたい衝動を懸命に堪えた。
　合鍵を使いベッドまで運んでやると、いつのまにやら葉山は小さな寝息をたてていた。
　静かに横たえ、布団を胸まで掛けて、やっと一息付いた僕の耳に聞こえたのは、
「……ギイ……」
　愛しい人を呼ぶ、葉山の声。そして、頬を伝う一筋の涙。

張り詰めていた理性の糸が、音もなく切れた。
葉山の口唇にそれを重ねる。僕の存在を知らしめる為に。
柔らかな口唇に一瞬離しかけ、でもいつの間にか頭の後ろに回っていた葉山の腕に、やんわりと引き戻された。
何度も重ねるキスが、しだいに深いものになっていく。
「……愛してる、ギイ……」
キスの合間に囁かれる言葉。
忍び込んだ舌を絡め、逃げるように引っ込めれば、またそれを追う。吐息までも貪るように、きつく吸うと葉山の口から飲みきれなかった唾液が零れた。
危険だと警告が鳴っている。
しかし溢れ出てしまった想いは、もう止められない……！
「託生……好きだ……」
微かに頷き先を促す葉山に煽られ、早急に体を求めた。
「はぁ……ん……ギイ……ギ……」
「託生……！」
ギイ……と恋人の名前を呼ぶ葉山に、胸が張り裂けそうな痛みが走る。葉山の全てがこの腕の中にあるのに、心だけ遠く彼方に飛び立っている。
揺れ合いながら、キスで葉山の呼吸を奪い言葉を塞ぐ。これ以上聞きたくなかった。
今お前を抱いているのは、この僕だ。気付いてくれ……託生！
祈りは空しく意識を失う瞬間まで、僕だと認識することはなかった。
眠りについた葉山の体を清め、何事もなかったかのようにパジャマを着せ掛けた。これで今までの関係が崩れてしまうのが怖かったからだ。
さっきは、僕を認識して欲しいと思ったのに、今は全て無かったことにしたいとは、随分いい性格してるよな。
苦笑をもらし、バスルームへと向かう背中に呟きが聞こえた。
"……章三……"
ギクリと歩みを止め、恐る恐る振り返る。しかし、ベッドには安らかな寝息の葉山。
「空耳か」
ハァーと大きく肩で安堵の溜息をつき、ドアを開けた。
翌日、葉山は二日酔いで何も覚えてはいなかった。だから、あの時間は一度だけ許された僕だけの大切な思い出。
そして、「ジュリアードに行かないかと、教授に言われている」と聞いた時、その思い出は心の奥底に封印した。
葉山はかなり迷っていた。
ギイへの変わらぬ想いを、身をもって知らされていた僕は、
「行ってこいよ」
葉山の肩をポンと押した。

葉山がニューヨークに行って１週間。
こんなにぼーっとした時は今までなかったんじゃないかと思う位、毎日が無意味に過ぎていった。
何もやる気が起きない。部屋の掃除さえ出来ない状態だった。
何度目かの溜息をついた時、
ピンポーン！
あまりにも軽いチャイムの音に、チッと舌打ちをし無言のまま乱暴にドアを開けた。
「よう、章三」
ドアの先には、やけに大人っぽくなった相棒が立っていた。
「……」

「どうしたんだ、章三？あぁ、こないだは、ありがとな」
　呆然として言葉が出ない僕に、畳み掛けるように言った。
「ギイ？なんでここにいるんだよ。……葉山はどうした！？」
　せっかく人が教えてやったのに、まだ口説いてないって言うのなら僕にも考えがあるぞ。
「託生なら、いるぜ」
　こちらからは死角になっているドアの向こうから、
「赤池君、ただいま」
　葉山がとびきりの笑顔で顔を出した。
「葉山……日本語勉強しろ」
　緩んでしまう顔を誤魔化して誤りを指摘すると、
「日本に帰ってきたんだから、ただいまでいいの！」
　案の定、頬を含まらせて拗ねた。
「とにかく入れよ。掃除は出来てないけど」
　二人を招き入れると、そのままキッチンへ向かう。
「めずらしいな、章三が掃除してないなんて。それとも、人間変わったのか？」
「僕は僕だよ。ちょっと疲れてただけだ」
　葉山がいなくなって、何もする気がなかった、なんてギイの前では死んでも言えないからな。こいつがヤキモチを焼くと手に負えない、のを僕は知っている。
「それはそうと、どうしたんだよ。荷物は送ってやるって言ったのに」
　コーヒーを持って部屋に戻ると、ギイはベッドに腰掛け、葉山はいつものように、隅に寄せてある自分のクッションを勝手に出して座っていた。
　それだけで、今までのイライラが嘘のように消えていく。
「一度、託生の部屋が見たかったんだ」
　葉山が口を開く前に、ギイが答えた。
「ダンボールしか置いてないって言ったのにね」
　呆れた口調の葉山に同意して、
「それだけの為に、高い航空券使ってはるばる日本まで来たのか？無駄使いもいいとこだぞ」
　諌めると、ギイは少し顔を赤らめ、
「うるさいな」
　ごろんとベッドに横になった。
　クスクス笑う葉山にコーヒーを手渡し、自分も一口飲む。暖かな沈黙が部屋の中に流れていた。
「拗ねてないで、一緒に飲もうよ」
　ギイはよっこらせと起き上がり、当然のように葉山の横に座り、カップに手を伸ばす。
　こうして３人が一つの部屋にいると、まるで祠堂に戻ったかのようだ。
　３年間離れていたことを感じさせないように、ギイと葉山はお互いを見詰めていた。
　会えなかった時間が、二人の想いを育てていたんだろう。
　完敗だよ、ギイ。お前しか葉山を守る者はいない。だから、僕も元の位置に戻ろう。障害の多い不憫な恋人達を見守る、苦労の耐えない相棒に。

　数日後荷物の整理も終わり、ニューヨークに帰る二人を成田まで見送りに来ていた。
「スマン。ちょっと、野暮用」
　と言いながら、ギイがトイレに向かった。それを横目で追っていると、
「赤池君」
「なんだ？」
　振り向くと、口唇に暖かいものが触れて、ゆっくりと離れていった。それが、葉山の口唇だったと認識するのに、数秒かかってしまった。
「葉山……？」

「今までありがとう。……章三」
　優しい慈しむような微笑にぶつかって、僕は全てを悟る。
「……託生！」
　葉山は突然の抱擁に驚きもせず、僕の背中に腕を廻し肩に頬を埋めた。
　あの時の呟きは、やはり空耳ではなかったのだ。葉山は無に戻したい僕の気持ちを知って、何もなかった振りをしていたのだ。
「幸せになれよ」
「……うん」
　抱き締めた体が、小さく震えていた。その温もりと甘い香りを忘れないように、腕に力を込める。
　と、
「あー！！お前ら何してるんだ！？」
　僕達のささやかな時間は、無情にも野暮用から帰ってきた邪魔者の声に引き裂かれた。
「別れの抱擁」
　僕と葉山の声がはもって、抱き合ったまま顔を見合わせクスクスと笑い転げる。
「離れろー！託生はオレの物だ！」
　ギイは葉山の背中から腕を廻し、くるりと抱きこんだ。
　葉山は真っ赤になりながら、「やめろよ」なんて言っているが、恥と言う二文字を知らないこいつには通用しない。
　ロビーに搭乗の案内が流れた。
「じゃ、オレ達そろそろ行くな」
「あぁ、元気でな」
「赤池君も、元気でね」
　葉山の声に片手を挙げ、にっこりと笑ってやる。葉山は安心したように微笑むと、ギイの後を追うように背中を向けた。
　二人の影が、搭乗口に消える。
「今度こそ、幸せになれよ。……託生」
　僕は小さく呟き、EXITへと歩き出した。

第２作目ですね。思いっきり、章託（笑）
でも精神的には、ギイタクですよ？
イレギュラーは苦手ではありますが、ギイタクには欠かせない人なので出してみました。
これも、わけありで掲載を中止してもらってます。
（２００２．９．４）

舞い降りたAngel (2001.8)

　ぼくはセントラルパークの湖のほとりに立っていた。
　冬のニューヨークは、日本と比べ物にならない程寒い。しかし、今のぼくには外気よりも、心が冷たく凍り付いていた。
「ごめんね、ギイ」
　昨日空港で再会したギイは、昔と変わらぬ熱い瞳でぼくを見ていた。そして、流されまいと必死にもがくぼくを、いとも簡単に捕まえてしまった。
『託生、タクミ……愛している……』一晩中囁かれた言葉。
「ぼくも愛してるよ、ギイ」
　世界中の誰よりも……。
　でも……ぼくは一度ギイを裏切ったんだ。それも彼の親友と……。
　恋人と親友の裏切り。その事実を知った時、ギイはどう思うだろう。ギイはどんなにか傷付くだろう。
　だから、何も言わずあの温かな腕から逃げてきてしまった。ぼくにはギイと一緒にいる資格なんかないんだ。
　ぼんやりと氷の張った湖を見ていると、何故か吸い込まれそうな気分になる。
　このまま吸い込まれたら、楽になれるかな。
　涙に霞む視界を捉えながら、嗚咽を押さえようと、その場に座り込んだ。
"どうしたの？気分でも悪いのかい"
　突然振った英語に、ギクリと肩が揺れる。振り向くと、若い金髪の男性が立っていた。
"驚かせちゃったかな？"
"いえ……"
"観光？"
"あ……まぁ……はい"
"こんな所にいてたら、風邪引いちゃうよ。よかったら、俺の家に来ない？"
　見ず知らずの人間に、それも世界一治安の悪いニューヨークで、普通だったら間髪要れずに断っていただろう。でも、自暴自棄になっていたぼくは、その申し出に頷いていた。
"はい……ありがとうございます"
"俺の名前はデリン。君は？"
"葉山託生です"
　そうして、知り合ったばかりのデリンの後を付いて歩き出した。途中、お風呂を入れててもらうよ、とデリンは家に電話を入れた。

"ただいま、ジェイス"
"おかえり。君がタクミ君かい？"
　３０代くらいの男性がにこやかに出迎えてくれた。
"すみません。突然おじゃまして"
"いやいやかまわないよ。私はジェイス。冷えているだろ？とりあえず、風呂に入ってきたらどうだい"
　ぼくはありがたく、お風呂を借りることにした。
　ギイに愛された体が鏡に映る。朝シャワーも浴びずに飛び出したものだから、ギイの香りがまだぼくに残っていた。
　全てを消し去るように、ザブンと頭からお湯を掛け、ついでに涙も洗い流す。
　自分から逃げてきたのに、泣くなんて許されないことだから。
　リビングに戻ると「温まるよ」と、デリンがコーヒーを用意して待ってくれていた。
「ありがとう」
　ぼくはソファに座ってカップに口をつけた。暖かい液体が体に染み込んでいく。余りにも暖かすぎて、涙腺が緩みそうになったぼくは、一気にコーヒーを煽った。

　あれ？おかしいな。何だか急に瞼が重くなって……目の前が暗くなっていく。二人の顔が遠くなっていく……。遠く……。

「ん……」
　重い瞼を上げると、見慣れない部屋が映った。ここは？
　記憶を辿ってみる。デリンに声を掛けられて、それから……。
「目が覚めたか」
　突然の声にビクリとして振り向くと、ベッドの横の椅子にギイが腕を組んで座っていた。
「ギ……」
　どうして、ギイがここに？確かデリンとジェイスのマンションに、ぼくはいたはずだ。
「生憎だったな、託生。あの二人はオレの友達なんだ」
　ニヤリと笑うギイに、先ほどのコーヒーに薬が混ざっていた事を悟った。
「ちなみに、ここは山奥の別荘だ。街までは半日歩いても着かないぜ」
「どうして……」
「どうして？それはオレの方が聞きたい！」
　鈍い光を灯した瞳のギイに、心底恐怖を覚えたぼくは、ベッドの上を後ずさる。
　そんなぼくにピクリと眉根を寄せ、ギイが飛び掛かった！
「いやだ！やめて！」
「初めからこうすればよかったんだ。なんなら、これから先、ずっと二人でここにいてもいいんだぜ、託生」
　ぼくの上に乗り上げ、顎を固定し正面から視線を合わせてギイが言う。
「お願い、やめて、ギイ！」
「オレが怖いか？……怖いだろうな。狂っちまってるからな。でもな、狂わせたのはお前だ！」
　噛みつくようなキス。シャツのボタンが弾け飛び、下着と一緒にズボンが蹴り下ろされた。逃げても逃げても追ってくるギイの胸を、力一杯押し返す。と、ギイはぼくの両手を片手で諌めると、頭上に縫い止め、一気に押し入った。
　体の芯を激痛が走る。愛のない乱暴な行為に、涙が止めどなく溢れ出てきた。
　痛い、何よりも胸が痛い。もう、やめて……ギイ！
「いや……やめて……こんなの、イヤだー！！」
　気の遠くなる意識を掻き集めて叫ぶと、
「お前、ズルイよ」
　ギイは動きを止め、ポツリと呟いた。
「オレ、昨日託生に逢えて、まだ愛してくれてるって確認できて、本当に嬉しかった。やっと、戻って来てくれたんだって。でも、この仕打ちは一体何だよ？お前、オレをそんなに焦らせて楽しいか？」
　泣いているような声のトーンに、思わず目を上げると、哀しそうな瞳とぶつかった。
「違う……違うんだ」
「何が違うんだ、託生？」
　こんなつもりじゃ、なかった。ただ、ギイに知られたくなかったんだ。
　でも、それは間違いだった。話を聞いて答えを出すのは、ぼくじゃない。ギイだ。
　ギイはこう思うだろうと、勝手に決め付けるなんて、なんて馬鹿なことをしてしまったんだろう。
「託生……？」
　押し黙ったぼくの頬に、優しくギイが口付けた。流れる涙を舌先が辿っていく。
　愛撫とは違う、ただぼくを落ち着かせる為だけの優しいキス。自分の気持ちを押さえてまでも、ぼくを慮るギイ。
　ごめんね。こんなぼくで、ごめんね。傷つけて、ごめんね。
「もう泣くなよ、託生。怖くないから……オレが悪かったよ。な？泣かないでくれ」
　ぼくの涙に臆したのか、ギイは軽くロづけると、ゆっくりぼくの中から体を抜こうとした。
　ぼくはギイの背中をギュッと抱き締めて、動きを阻んだ。

「託生？」
「ごめん……ごめんね、ギイ」
「おい、託生。もう怒ってないから、泣かないでくれよ」
　ギイが子供をあやすように、何度も背中を撫でてくれる。
「違う、ギイ……ぼく……ぼく……」
「託生？」
「……寂しくて……どうしようもなくて……赤池君と……ごめんなさい……！」
　ギイは一瞬ポカンとした顔をして、ぼくの瞳を覗き込み、台詞の意味するところを理解すると、息が出来ない位きつくきつく抱き締めた。
　どのくらい時間がたったのだろう。ギイはごめんなさいとしがみつくぼくを、ゆっくりと引き剥がし、頬を両手で包み込んだ。
「言ってくれて、嬉しいよ」
　優しい瞳で、ぼくを見詰める。
　嬉しい……？
「謝るのはオレの方だ。寂しい思いさせて、放ったらかしにして、すまなかった」
「ギイ……？」
「愛してるよ、託生」
　優しくキス。輪郭をなぞるように、小さなキスを繰り返し、深く合わせる。舌を絡め、逃げて誘って、いつのまにか、ぼくの腕はギイの頭に廻され、柔らかな髪をまさぐっていた。
　ぼくの中に入ったままだったギイも徐々に勢いを取り戻し、ぼくもギイに煽られ全身でギイに応える。と、ふいにギイが体を退けた。
「ギ……イ……？」
　ギイはふわりと微笑むとゆっくり時間を掛け、体中をキスで埋め尽くしていった。頭の先から足の指1本１本までも、ぼくの罪を消し去るように、所有印を押していく。
「や……ダメ……早……く」
「まだだ」
　甘い疼きから逃れようと体を横にすると、今度は背中を愛される。
「ん……！」
　これが罰だとでも言うように、ギイは口唇で手で言葉で、ぼくを崖の淵に追いやっていく。
「も……う……お願い……早く来て……ギイ……！」
　理性をかなぐり捨て、涙ながらに哀願すると、ギイは満足そうな笑みを浮かべ、ぼくの上に覆い被さった。
　そしてぼくたちは、深い闇に落ちていった。

　嵐のような情事の後。雪が積もる外気が嘘のような温かい腕の中で、ぼくは幸せを噛み締めていた。言葉もなく、ただ愛し気に髪を梳く長い指の感触が、心地よい。
「託生」
「ん……？」
　見上げると、そのまま額にキス。
「一度二人で、章三に会いに行こう」
「え？」
　まさかギイ……。
「そんな不安そうな顔するなよ。大丈夫、殴りゃしないよ」
　ふふっと笑って、ぼくの前髪を掻き上げた。
「奴の事は感謝こそすれ、怒ってなんかいないぜ」
　方法はどうであれ、託生を助けてくれたんだからな。
「じゃあ、何？」

「章三が安心して、新しい恋が出来るように、託生の顔を見せに行こう」
「ぼくの顔？」
　同じマンションに住んでいたのだから、ぼくの顔なんて見飽きてると思うんだけどな。
「今の託生。凄く綺麗な顔してる」
「ななな、何言ってるんだよ！そんなことあるわけ……ん」
　ふさがれた口唇。
　軽く舌を絡め、「あるんだよ」夢を見るように薄茶色の瞳を細めて、ぼくを見詰める。
　いつまでもその瞳に映っていたくて、つい言葉が滑り落ちてしまうんだ。
「愛してるよ、ギイ……世界中で一番……」
　ギイは一瞬目を見開き、これ以上ない嬉しそうな顔をして、ぼくを抱き締めた。
　温かなギイの腕の中。ここがぼくの帰る場所。

ギイ、章三君と続いたら、やっぱり主人公の託生くんでしょう。
で昔からギイって、絶対ストーカーだよって思ってたものですから（こらこら）
ストーカーっぷりを発動してみたわけです。
あの美男子じゃなかったら、捕まるぞ。
ちなみに、ギイサイドのお話もどこかにあります（笑）
（２００２．９．４）

追記
ギイサイドは表に出しました。
自己責任の上、ご覧ください
（２００４．１２．１７）

舞い降りたAngel～ギイバージョン～ (2001.9)*Night*

"タクミ君が、見つかったそうだよ"
　託生を探して街の中を彷徨い歩いていた時、ポケットの携帯が鳴りジェイスが告げた。
　デリンがそのまま家に連れて帰り、風呂にでも入れておくと言う。
"オレもすぐ行くけど、何も言わずにいてくれ。頼んだぞ"
　一度マンションに戻り、机の引き出しから常備している睡眠薬を取り出すと、車で二人の家に向かった。

　今朝、託生が戻ってきた安心感からか、いつもより寝過ごしてしまったオレは、隣に寝ているはずの託生がいないことに気付き飛び起きた。
「託生、どこだ託生？」
　リビング、ダイニング、音楽室、どこを探しても託生がいない。
「まさか……」
　寝室のクローゼットを開くと、昨日置いたはずの託生のスーツケースとバイオリンがなくなっている。
「どうして……」
　昨日、愛してるって言ったじゃないか。お前も応えてくれたよな。あの言葉は何だったんだよ、託生……！
　呆然とクローゼットの扉に額を押し付けた時、ジェイスからの電話が鳴り、オレは手短に事情を説明して捜索を手伝ってもらうことにした。

　ジェイスのマンションのチャイムを鳴らす。オートロックを外してもらい部屋へ入ると、託生は風呂に入っているところだと言う。
"理由は聞かないが、タクミ君はあの湖の所にいたらしいぞ"
　ジェイスがコーヒーを用意しながら、話し掛ける。
"オレもまだ解からないさ。それよりジェイス、そのコーヒー貸してくれ"
　何するんだ？と、瞳で問い掛けるジェイスを制して、オレは持ってきた睡眠薬を入れた。
"おい、ギイ！お前、今何いれたんだよ？"
　デリンが慌てて、オレの右腕を掴む。
"睡眠薬"
"何考えてるんだよ。そんな事しなくても、話し合いくらい出来るだろ？"
"このままだと、話し合いにならない"
　また逃げられたりでもしたら、自分がどうなるかわからない。
"でも……"
"ギイ、こんなことするなんて、君らしくないぞ"
　熱くなるデリンとは反対に、ジェイスが冷静な声で非難した。
"託生が側にいないと、オレはオレじゃなくなるんだよ"
"狂ってるのか、ギイ？"
"そうかもな……"
　バスルームのドアが開き、託生が出てきた。オレはデリンに目で合図してダイニングに隠れる。
　何も知らない託生は、差し出されたコーヒーに素直に口をつけた。しばらくして薬が効いてきたのか、ソファにもたれかかり瞼を閉じた。
「託生……」
　ダイニングから出てきたオレは託生の背中に腕を廻し、小声で呼び掛ける。
「ギ……イ……」
　ピクリと睫毛が揺れ、オレの肩に額を摺り寄せふわりと笑うと、安心したようにもう一度眠りに落ちた。

腕の中の温もりに微笑が漏れる。
　もう、逃がさない……。
　そんなオレ達を、複雑な表情で二人は見ていた。
"世話になったな"
　ジェイスとデリンが託生の荷物を持って、車まで見送りに来てくれた。
"話し合いがついたら、一度二人で家に来てくれ。私達はタクミ君に謝らなければいけないからな"
"あぁ、わかったよ"
"ギイ、暴力はやめろよ"
"オレが託生を殴るわけないだろ？"
"いや、今のお前はわからない"
　オレは苦笑を洩らすと、車を出した。

　別荘に着き、寝室のベッドに託生を運ぶ。
　あどけない寝顔の託生。このままお前を閉じ込めておきたいよ。誰の目にも触れさせない。ずっと、オレの側に……。
「ん……」
　しばらくして託生がうっすらと瞼を上げた。ぼんやりと焦点の合わない瞳で、部屋の中を見廻している。
「目が覚めたか」
　オレの声にギクリと肩を揺らし、託生が振り向いた。
「ギ……」
「生憎だったな、託生。あの二人はオレの友達なんだ」
　ニヤリと笑うと、託生は信じられないものを見るように、オレを見詰めた。
「ちなみに、ここは山奥の別荘だ。街までは半日歩いても着かないぜ」
「どうして……」
「どうして？それはオレの方が聞きたい！」
　思わず語尾が強くなってしまったオレに、託生は恐怖を感じたのかベッドを後ずさった。
　逃げられる！
　瞬間、オレは託生にのしかかりベッドに押し付けた。
「いやだ！やめて！」
「初めからこうすればよかったんだ。なんなら、これから先、ずっと二人でここにいてもいいんだぜ、託生」
　託生を怖がらせたくない。そう思うのに、オレの体は意思を無視して、託生を抱き締めてしまう。
「お願い、やめて、ギイ！」
「オレが怖いか？……怖いだろうな。狂っちまってるからな。でもな、狂わせたのはお前だ！」
　託生の揺れた瞳が、なけなしの理性を侵す。
　シャツを力任せに引き裂き、下着と一緒にズボンを蹴り落とす。託生は首を左右に打ち振り、オレのキスから逃れようと抵抗した。そのわずかな抵抗でさえも、今のオレには全てを拒否されたように映る。
　オレのものだ……！体に刻み込んでやる！
　何の準備もせずに、託生の腕を頭上で諌め、一気に託生を貫いた。託生の顔が苦痛に歪み、涙が溢れ出てきた。それでも、行為を止めることが出来ない。このまま託生を殺してしまいそうな自分を、繋ぎとめる最後の手段だから……！
「いや……やめて……こんなの、イヤだー！！」
　託生の訊いた事もない悲鳴に、ビクリして動きを止めた。オレは、一体……。
「お前、ズルイよ」
　我に帰ったオレは、諌めた両腕を解放し呟いた
「オレ、昨日託生に逢えて、まだ愛してくれてるって確認できて、本当に嬉しかった。やっと、戻って来てくれたんだって。でも、この仕打ちは一体何だよ？お前、オレをそんなに焦らせて楽しいか？」

　託生が視線を合わせた。非難するわけでもなく、ただ何かに恐れているような……。
「違う……違うんだ」
「何が違うんだ、託生？」
　何を言おうとしているのか。託生は口唇を噛み締め、声もなく涙を流した。
「託生……？」
　託生の頬に口唇を寄せると、瞳を閉じて応えた。何度も優しいキスを繰り返して、託生が落ち着くのを待つ。
「もう泣くなよ、託生。怖くないから……オレが悪かったよ。な？泣かないでくれ」
　大人しくオレのされるがままキスを受ける託生に、冷静な自分を取り戻し、苦痛を取り除く為にオレは体を退けようとした。とたん、託生が背中に腕を廻し、動きを阻む。
「託生？」
「ごめん……ごめんね、ギイ」
「おい、託生。もう怒ってないから、泣かないでくれよ」
　泣きながらしがみ付く託生の背中に腕を廻し、子供をあやすようにゆっくりと撫でる。今までの勢いはどこに行ったのか。涙を流す託生がオレは一番苦手なのだ。
「違う、ギイ……ぼく……ぼく……」
「託生？」
「……寂しくて……どうしようもなくて……赤池君と……ごめんなさい……！」
　え……？託生は今なんて言ったんだ？章三と……何があったと言うんだ。
　託生の瞳を覗き込むと、涙の潤んだそれに台詞の意味を理解する。託生をきつく抱き締めて、震える自分の体を落ち着かせようとした。
　側に居た章三と、そういう仲になったとしても不思議ではない。しかし、寂しかったからという理由で章三に抱かれたのなら、それはオレの責任ではないか？
　オレから逃げた理由も、これで合点がいく。
　ごめんなさいと言い続ける託生の腕を解いて、怖がらせないように瞳を覗き込む。
「言ってくれて、嬉しいよ」
　託生は怒られるとでも思っていたのだろうか。オレの顔をまじまじと見詰め返した。
「謝るのはオレの方だ。寂しい思いさせて、放ったらかしにして、すまなかった」
「ギイ……？」
「愛してるよ、託生」
　輪郭をなぞるように、小さなキスを繰り返し深く合わせる。舌を絡め逃げる託生のそれを、追いかけては捕まえる。息が出来ないくらい、きつく口唇を吸うと、託生は苦しげに顔をずらして、小さな溜息と共に飲みきれなかった唾液が零れた。
　頬を伝い耳元に口唇を寄せる。とたん濡れた口唇から甘い声が紡ぎ出された。
　きつかった託生の中も徐々に潤い、ゆっくりと腰を使うと、甘い声と共に動きを合わせて託生の体が揺らめく。
　託生の淫らな動きに煽られて、限界を感じたオレは体を退けた。それより先にやりたい事があった。
「ギ……イ……？」
　訝しげな託生の視線を笑って受け止め、オレは全身にキスの雨を降らせる。頭の先から足の指1本1本までも、全てに所有印を押していく。託生に触れられるのは、こうして泣かすことが出来るのは、この世でオレ一人だと感じたかった。
「や……ダメ……早……く」
「まだだ」
　耐えられなくなった託生は、甘い疼きから逃れようと体を横にした。露になった背中をゆっくりと舐める。背骨に添ってきつく吸うと、ビクリと託生の体が震えた。
「ん……！」
　逃れようと立て肘を突いてずり上がる体を、腕を廻して固定する。一層大きくなった託生のすすり泣きが、オレの理性を熱く侵す。愛しさに、もっと泣かせて喘がせたい衝動を抑えきれない。

「も……う……お願い……早く来て……ギイ……！」
　昔の託生なら絶対言うはずのない言葉に、満足の笑みが浮かぶ。託生の体を仰向けに返し、大きく脚を広げて体を割り込ませると、羞恥に顔を赤く染めた託生が目を伏せた。
「あぁ……！」
　そして指を絡ませ一気に身を沈める。衝撃に眉を寄せ息を詰める託生の口唇に、キスを送る。優しくなぞる様にキスを重ねると、しだいに体の緊張が緩まった。
「ギ……イ……」
「託生……」
　潤んだ瞳でオレの腰に脚を巻きつかせてきた託生に、眩暈を感じる。今日は託生が我慢できなくなるまで焦らそうと思っていたのに、こんなことをされてはオレの方がたまらない。
「煽るなよ、託生……。オレ、止まらなくなるぞ」
「……いいよ……ぼくも……もう……止まらない」
　託生の言葉に、オレの中の何かが弾けた。乱暴に口唇を奪って、シーツに押し付ける。舌を絡め、腕を絡め、心まで絡め合わせて、底のない快楽の海に身を躍らせた。

　瞳を閉じたまま、ぼんやりと体を委ねる託生に愛しさが募る。
　オレだけを、ずっと愛してほしい。託生の心が少しでも傾くものがあれば、全てこの手でぶち壊してやる。
　章三……。たとえ相棒でも、オレは託生を渡す気はない。お前には酷な事だと思うが、オレの側にいる託生を見てもらおう。それだけで、お前はわかってくれるよな。
「託生」
「ん……？」
「一度二人で、章三に会いに行こう」
「え？」
　不安げに揺れる瞳を、キスで塞ぐ。
「そんな不安そうな顔するなよ。大丈夫、殴りゃしないよ」
　口唇を額に移し、前髪ごと口づけた。
「奴の事は感謝こそすれ、怒ってなんかいないぜ」
　方法はどうであれ、託生を助けてくれたんだからな。
「じゃあ、何？」
「章三が安心して、新しい恋が出来るように、託生の顔を見せに行こう」
「ぼくの顔？」
「今の託生。凄く綺麗な顔してる」
「ななな、何言ってるんだよ！そんなことあるわけ……ん」
　慌てて言い募る託生の口唇を、キスで塞ぐ。
　信じてもらえないのは昔からの事だが、本当のことなんだぜ。今のお前は世界中で一番綺麗だ。
　目を細めて見詰めるオレに、
「愛してるよ、ギイ……世界中で一番……」
　何より欲しい言葉をさらりと言った。
　抱き締める腕に力を込めて、想いに応える。
　もう二度と離さない……！

Memory (2001.8)

「託生の荷物を取りに行こう」
　ギイの一声で、あれよあれよと連れられて、ぼくは一週間ぶりに日本の地を踏み締めた。
　懐かしいなんて思えるはずもなく、海外旅行から帰ってきたと言った方がふさわしい。
「ギイ、一週間も仕事休んでるのに、ほんとに大丈夫なの？」
　二人分の荷物を、両手に抱えたギイに話し掛けた。
「ま、一応仕事絡みの来日ってとこかな。二日程ちょっと出る事になってる」
「そうなんだ」
「ずっと託生と居たかったんだけどな。ごめんな」
　眉を寄せて心底済まなそうに、ギイが謝った。
「気にしなくていいよ。ぼく、ズルさせちゃってるんじゃないかと、そっちの方が気になってたから」
「でもな、託生一人ホテルに置いていくのもな」
　心配そうな顔をしたギイに、ついぼくは笑ってしまう。
「ここは日本だよ。大丈夫、暇だったら誰かに遊んでもらうから」
　ぼくの言葉に複雑な顔をして、
「誰かって、誰だ？」
　ギイが訊いた。
「うーん。赤池君も居るし、利久も居るし、三洲君、真行寺君、野沢君、矢倉君、八津君、森山先輩、柴田先輩、奈良先輩、えーっと、それから」
「……もういい、わかった。ようするにオレがいなくても、託生は遊び相手には不自由してないわけだ」
　ギイは、ふいっと横を向いて、足早にロビーを歩いていく。
「待ってよ、ギイ。怒ってるの？」
「別に」
　そっけない返事。相変わらずヤキモチ焼きで、ぼくは少し嬉しくなってしまう。
「行かないよ。ちゃんとホテルで、待ってるから」
　ぼくが言うと、ギイは前を向いたまま、頬を赤らめた。

　チェックインを済ませ、荷物を置いたぼく達は、まず章三の部屋に向かった。ぼくと章三の部屋は、同じマンションの端と端である。
　突然現れたぼくたちに、章三は呆れかえりながらも、笑顔で出迎えてくれた。
　章三と一度だけ夜を共にした事をギイに話していたので、ぼくは内心ヒヤヒヤしていたのだが、ギイはいつもと変わらず、部屋は祠堂にいた頃のように暖かかった。
　一時間程たった頃、「せっかく来てもらったのに、すまないんだが」と、章三は用事があるからと出掛けていった。
「ここが、託生の部屋か」
　一週間ぶりに入ったぼくの部屋。鍵を開けて部屋に入ると、ギイは物珍しそうにグルリと見回した。
「ベッドとダンボールしかないだろ？」
　NYに送るだけの荷物しかないフローリングの８畳間。
　たった一週間の事なのに、何となく違和感を感じる。部屋がガランとしているからだけではなく、ここはぼくにとって、すでに過去の事になってしまっているからだ。
「託生の匂いがする」
「そうかな？」
　ぼくは、ブレーカーを上げて、エアコンのスイッチを入れた。カーテンも取り外しているので、部屋の中はかなり冷えていたのだ。
「章三に毛布でも借りてきたらよかったな」
「え、でも、もうすぐ暖かくなるよ」

　現にベランダ側の窓に、白く結露が浮き始めていた。
「これじゃ、寒いだろうな」
　ギイはトレンチコートを脱いで、部屋の隅に置く。ぼくも倣ってコートを脱いだ。
「そんなに寒い？だったら、電気毛布出そうか？」
　ぼくはダンボールの一つを開けて、中からギイに貰った電気毛布を取り出した。
　でも、おかしいな。ギイは寒さには強かったはずだ。寒がりのぼくの為に、と言うのならわかるけど、でもぼくは今それ程、寒くない。
　電気毛布を手渡すと、ギイはそれを広げてベッドに敷いた。
「何してるの？」
　嫌な予感が頭の中を横切る。
「もちろん、こうする為さ」
　言うなりぼくの腕を掴んで、ベッドに押し倒した。
「ちょっ……何、考えてるのさ！」
「託生を抱きたいって考えてる」
「そうじゃなくって！ちゃんとホテルに泊まるのに、どうしてこんな狭いとこで……」
「心配するな。夜も任せとけ」
「ギイ！！」
　言ってる間にも、ギイの口唇がぼくの首筋を辿る。
「や……やめてよ、ギイ」
　思わず声が裏返ってしまう。ギイの口唇から逃れようと、首を横に振った。と、ぼくの顎を固定して、ギイは正面からぼくを見据えた。
「オレは、ここで託生を抱きたい」
　真剣な眼差し。それで、わかってしまった。裏切りの行為があったのが、このベッドであるって気が付いた事。ポーカーフェイスを装ってはいるが、ギイの瞳が物語っている。
「ギイ……」
「嫌か？」
　切なそうなギイの瞳を捕えながら、ぼくはゆっくり瞳を閉じて、ギイを引き寄せた。
　それが、答え……。

「寒くないか？」
　二人で包まった毛布の中。寒さなど感じない程火照った体を、ギイは包み込むように抱き寄せて、ぼくの髪にキスを落とした。
「うん、大丈夫」
　ギイの胸に擦り寄って、しばし余韻に浸ってみる。
「祠堂のみんなと、今でも付き合いがあったんだな」
「え、うん、そうだよ。東京出ている人多いし」
　ぼくはギイを見上げて言った。
「章三と片倉くらいかなと思っていた」
「うん。初めはそうだったんだけど、いつか同窓会みたいなのがあってね、誰が主催だったかは、忘れちゃったけど。ぼくも声掛けられて、それから週末ごとに、誰かしら遊びに来るようになったんだ」
「毎週？」
「そう、毎週」
　へぇとギイは眉を上げた。
「溜まり場って言ったら語弊があるかもしれないけど、『生きてるかー？』って言いながら、差し入れ持って次から次に集まってきてたんだ。旅行に行ったり、ここで酒盛りしたり、楽しかったよ」
　にこりと笑うと、ギイは目を細めて額に口付けた。
「託生が天使だから、みんなが安らぎを求めて集まるんだよ」

「ギイ、それ惚れた欲目」
「そうか？」
「そうだよ。むしろ逆だよ。ぼくにとっては、みんなが天使だった。……苦しい時も、悲しい時も、みんな何も言わずに側にいて助けてくれたんだ」
　ギイは静かに、耳を傾けた。
「ギイがいなくて寂しかったけど、みんながいてくれたから耐えられたし、今のぼくがあるんだ。赤池君が肩を押してくれたから、ギイにもう一度逢う事が出来たんだよ」
　一人一人の顔が目に浮かんでくる。ありがとうって、心の中で呟いた。
「でも、そんな天使をぼくにくれたのは、ギイだけどね」
　ギイがぼくを変えてくれたから、みんなが側にいてくれた。他人の優しさや温もり、涙が出るくらいの想いを、ぼくに教えてくれた。
「じゃ、オレは神様ってことか？」
「あはは。そうだね。でも、ヘビースモーカーの神様なんて聞いたことないや」
「言ったな。こいつ」
　こういう口は、こうしてやる。
　ギイは囁くなり、ぼくの唇をキスで塞いだ。啄むように、何度も優しいキスをくれる。ぼくはギイの頬を両手で包み、瞳を合わせて言った。
「ここで、たくさんの思い出が出来たんだよ」
　NYに帰ったら、全部話してあげるね。
　ギイはふわりと微笑み、もう一度、優しいキスをくれた。

「Angel」第４弾ってところなんですが、これを書いたときは、まぁ精神的にズタボロの状態でした。
それを、助けてくれた皆さんにと言う気持ちで、託生くんの台詞に託したわけです。
これを書こうと思わなかったら、たぶん今ここにはいないだろうと思います。
このお話境に、ネットというものを考えさせられました。
（２００２．９．４）

Lucifer(2010.9)*Night*

　ぼくがいるのを一刻も早く確かめるために近づく、革靴の大きな音。
　ノックもなしに開かれたドアに向かって声を掛けた。
「お帰り、ギイ」
「ただいま、託生」
　ぼくを抱きしめ、ただいまのキスを唇に落としたギイは、嬉しそうに微笑んだ。
　でも、この微笑の裏に狂気が潜んでいることを、ぼくは知っている。
「風呂は入ったか？」
「ううん、まだ」
「よし、来い」
　ギイはネクタイと上着をベッドに放り、ぼくを抱き上げバスルームへと向かった。それが、今のぼく達の日常。
　いつ崩れるかもしれない砂上の楼閣……。

　一ヶ月前。
　ギイと再会した翌日マンションから逃げ出したぼくは、彼の友達に睡眠薬を飲まされた後、山奥の別荘に連れられていた。
　誰の助けも呼べない隔離された空間。
　ギイの怒りと狂気に満ちた瞳に、今まで経験したことのない恐怖を感じた僕は思わず後ずさった。
　それが、ギイの心を壊すことになるとは思いもせずに……！
「初めからこうすればよかったんだ。なんなら、これから先、ずっと二人でここにいてもいいんだぜ、託生」
「お願い、やめて、ギイ！」
　それから……。
　意識を失うまで抱かれ、気付くとまた抱かれ、昼も夜も時間さえもわからないまま抱かれ続け、自分の痴態を恥ずかしく感じる間もなく、体中に赤い烙印が落とされていった。
　汗なのか精液なのかもはや区別がつかないくらい汚れた下肢が、シーツに張り付き波を作る。
　そして時折、バスローブを身に着けたギイが、
「腹、減っただろ？」
　と、スープのようなものを、まるで赤ん坊に食べさせるようにゆっくりと口元に運んだ。
　その後「洗ってやるよ」と動くこともままならないぼくを抱き上げ、バスルームに連れて行き、ぼくの抵抗を押さえつけ中の残滓を丁寧に掻き出した。
　そして、またベッドで……。
　あれから、何日経ったのだろうか。
　もう既に、体に力は入らず、散々喘がされた声は掠れて出ず、目の周りは流し続けた涙で痛み、ギイを受け入れている部分も感覚がなくなっていた。
　このまま、ギイの腕の中で死ぬのかな。
　背後から杭を打ち込まれ、朦朧としながら考える。
　そうして、また絶頂に攫われぼくの意識は暗闇に堕ちた。

　次に目を開けたときに飛び込んできたのは、真っ白い天井。
　ここは……？
「託生さん、申し訳ありません。お体の具合はどうですか？」
「し……まおか……さん？」
　ベッド脇の簡易椅子に座っていたのは、島岡さんだった。

端整な顔に疲労を滲ませながら、島岡さんが頭を下げ、
「本当に、申し訳ありません。もっと早くに気付いていれば……」
と唇を噛んだ。
一週間の休暇が終わる前日、島岡さんはスケジュールを伝えるため、ギイに電話をしたそうだ。
でも何度かけても応答がなく、何かあったのだろうかとマンションに行くと、タイミング良く章三から連絡が入り————ぼくが「落ち着いたら連絡する」と言っていたのに、電話がなかったかららしい————島岡さんはぼくがNYにいる事を知ったのだ。
そして車のGPSから別荘を割り出し、見つけ出したぼくを病院に運んだのだと、島岡さんは言った。
「ギイは……？」
「託生さん……」
「ギイは、どこにいるんですか？」
あれほどまでに、ぼくに執着したギイが、黙っているはずがない。すんなりぼくを手放すなんて事は、とてもじゃないけど考えられない。
それに、ぼくは……。
「どうして貴方は……ギイにひどい事をされたのは、託生さんでしょ？」
「違います！……ぼくのせいなんです……ぼくが逃げたから……ギイは……」
「それでもです。ギイは、人としてやってはいけないことをしたんです」
監禁し強姦まがいの行為をしたギイは、許されない人間なのかもしれない。
でも、ぼくは、ギイを……それでも、ギイを愛してる。
だから……。
「ギイに会わせてください！」

歩くことができなかったぼくを車椅子に座らせ、島岡さんはエレベーターを一つ上の階に合わせた。エレベーターを降りると、廊下にには多数の警護の人達が立ち、目を光らせている。
余りの多さに尻込みしてしまいそうな中、島岡さんは真っ直ぐ進み、一番奥の扉を開いた。そして、また扉。
VIP専用と思われる病室は防弾になっているのだろうか。とても重厚な扉で中の様子は全くわからない。
室内に入ると、幾人かの病院スタッフがベッドを取り囲み、その真ん中に手枷足枷でベッドに固定されたギイが青白い顔で眠っていた。
「どうして……」
「今は鎮静剤と睡眠薬で眠っています。託生さんと引き離したとき正気を失い暴れたので、このような処置を取っています」
「そんな……」
しばらくすると、ギイの瞼が震え目を開いた。とたん、周りにいる病院スタッフの間に緊張が走る。
ギイは薬がまだ効いているのか、ぼんやりと周囲を見回していたが、意識がはっきり覚醒すると眼光を鋭く光らせた。
そして、自分を取り囲んでいる病院スタッフを睨みつける。
”これを外せ！さっさと外しやがれ！！こんちくしょう！！”
Fグループの次期トップである普段の冷静な人物像からは想像がつかない、感情剥き出しの姿。
大きなベッドまでもがガタガタと揺れる力に、ギイの腕に巻かれている包帯に血が滲む。
その痛々しい姿に、ぼくの胸がズキリと鳴った。
「……ギイ」
掠れた声。
囁くような小さな声なのに、ギイは暴れるのを止め、扉の前にいるぼくを見つけると、顔を歪ませてぼくを凝視した。
「託生……」

　そして、括り付けられている手が、ぼくを掴み取るように動く。
「ギイを自由にしてください」
「託生さん……！」
「お願いします」
　ぼくの言葉に、島岡さんが病院スタッフに指示を出したものの、医師は顔を縦に振らない。その間も、ギイはずっとぼくから視線を外さなかった。
　島岡さんの必死の説得に医師は拘束を恐る恐る外し、無意識だろうか、ギイから離れていく。
　自由になったギイはゆっくり起き上がり、裸足のままぼくに向かって歩いてきた。
「ギイ……」
　両手を広げると、ギイは泣き笑いのような表情をして床に膝を突き、ぼくの胸に顔を押し付け抱きしめる。
「託生……託生……」
　ギイの頭を両腕で包むと、
「愛してるんだ……お前が、オレには必要なんだ……逃げないでくれ……託生……託生……」
　行かないでくれと、涙交じりに訴えるギイに、
「うん、どこにも行かない。ギイの傍にいるよ」
　と、応えていた。
　誰よりも強い人を、ここまで追い込んでしまった、ぼくの罪。
「託生……」
「どこにも、行かないよ。大丈夫だよ、ギイ」
　ギイがギイでいるために、ぼくが必要ならば、ぼくはずっと君の傍にいよう。
　それで、君の心が守れるのなら……。
　愛してる、ギイ……。

　ギイはベッドに座って、ぼくの洗い髪を丁寧にタオルで拭いた。そして、そのまま髪にキスを落とす。
「愛してる、託生」
「うん、ぼくも、愛してる」
　近づく唇に、ぼくはギイの背中に腕を回し目を閉じた。
　その時、ギイの瞳が、鈍く光ったのをぼくは知らない。

以前から「こんなギイを書いてみたいな」と「書いていいのだろうか」と悩みつつ、欲求に負け、ちょこちょこ書いてました。
どこかでストーカー気質があるんじゃないかと言ったような気もしますが、ギイって託生くんを手に入れた時から、人の何倍もの独占欲を持ってると思うんですよ。
そんでもって、恋慕と狂気が表裏一体みたいな。
完璧な人ほど、狂ったときは怖いみたいな。
でも、こんなギイも好きなんですけどね（爆）
(2010.9.26)

奥付

ANGEL

りか

URL http://greem.shop-pure.net
MAIL greenhouse@shop-pure.net